赤ちゃんの四季（43）　平成23年秋

三つ子の魂百までも

「三つ子の魂百までも」は、日本古来の言い伝えで、生後３年までの育児環境が子どものこころの発達に大きな影響を与えることを言います。アップリカ育児書2003年版には、同じような表現が日本だけでなく、世界中８０カ国で同じような言い伝えのあることが紹介されています。

英語圏の米国、英国、オーストラリアでは、”What is learned in the cradle is carried to the grave.”（ゆりかごの中で覚えたことは墓場まで持っていく）、イスラム圏のヨルダンでは、アラビア語で「非常に幼いときに学んだことは石に刻まれたようなものだ」。中国では、「三歳看老」（三歳の子どもを見たら老後がわかる）、韓国には、「三歳までに学んだことは８０歳までもち続ける」など、言語、宗教、文化に関係なく、３歳までの育児環境の大切さは世界共通の認識のようです。

脳細胞をつなぐ神経ネットワークは、生後３歳までの間に最も活発に発達し、脳機能の基盤が完成します。この子どもたちの脳の発達を脅かすのが、乳幼児虐待です。最も信頼できるはずの自分の親から受ける虐待は、子どもの脳への大きなトラウマ、傷となって、終生背負い続けることになります。虐待を受けて育った子が親になったとき、自らの子に同じように虐待を加えるという、虐待の世代間連鎖を引き起こします。

核家族、シングルペアレントが増える中、親の育児負担軽減のためにいろんな育児支援策が行われていますが、育児支援で最も大切なことは「子どもを守る」ということを決して忘れてはなりません。